

---

# IS 太陽の心臓と可能性の獣

I S - D

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 太陽の心臓と可能性の獣

### 【Nコード】

N1783S

### 【作者名】

IS-D

### 【あらすじ】

白騎士事件、ISが世界に知られるようになった事件・・・だが一つの物により創造者の思惑を超える結末を残す。思いを形にし世界に溢れたやさしき燐光を創造者は知りたかった、だがそれは人が理解できる物ではなかった。そう、だから作ったサイコフレイムを具現化する物を思い伝え対話する心臓、太陽炉を持つて。

私のたった一つの望み

可能性の獣、太陽の子にして希望の象徴

一人の少年と五人の少女達が歩む、機械仕掛けの神たる器、可能性の獣ユニコーン

すべてはUC計画の鍵、L a + によつて至る。人類革新への道、来るべき対話のために。

この小説は、多数のクロスオーバーがあり、ガンダム、A C f a、S R Wの設定などが使われています。あと基本ハーレムにしますがシャルメインです。最後に束さん無双です

## ブログ 世界を覆う光、次世代の始まり（前書き）

IS初のSSです、設定のみのクロスなど微クロスがあります。ちなみに私はシャルロット党で、インフィニツ党です。でわわ開幕ー！

## プロローグ 世界を覆う光、次世代の始まり

### プロローグ

白騎士事件、本来あつただろう事象は一つの物によつて改変される。それはサイコフレーム、本来ならハッキングにより日本を射程に収めたICBM半数を駆逐しそれでも人知を超えた性能の見せつけるはずだった白騎士は、その創造者の予想を遥かに超える力を見せる。操縦者の意識の集中、そして人々の絶望それを覆す光、サイコフレームの光。緑森見せる光は人の温かみを見せる。やさしき燐光は、先見通す者——篠ノ之束の写す世界を外れる……

「サイコフレーム……人の意思を顕現し伝える物……単に追隨性を上げる素材だったのになあ」白騎士の基本スペック完全に無視した物理干渉、それに追隨して、発生した謎のフィールド——

——

篠ノ之束は今、歓喜に包まれていた。これを機に世界は変わる、ISという絶対的な力によつてあらゆる方面に……それを見通し、自分を中心にして人類はそれに合わせて革新する。そう見たはずだった——

少し前に自分の前に現れたもの、黒い穴の先から見えてきた緑色の燐光を放つ物、それに織村千冬が触れた時、その物に興味が湧いた。人の思いによつて反応し力を放つ、それを持つて自分の物をさらに良き最良の物に変えるただの物だったはずなのに……自分の思惑さえ超える物

「おもしろいねえー この束さんの予想を超えることをやってのけ

るんなんでね・・・これはちーちゃんがすごいのもあるんだけど  
ど・・・でもそれだけじゃないよねえ」

そう言つて、目を落とした先には手の上には緑色に光る物があつた。  
・・・

白騎士は2000発という完全に迎撃不可能の多量のICBMを剣  
と燐光放つ身から発する力で全て迎撃して見せた。その光は世界全  
土で観測されその存在を示した。

遙かに人知を超えた力を見せた白騎士を捕獲または撃破しようと、  
各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などがあつたがその絶大な存  
在感から戦意を喪失する者が多かったという、そのために、多少は  
戦闘があつたが死者は皆無だった。そこからISに対しての関心が  
集まる。

世界はISによって変わつていった、白騎士事件によって――

とある都市ビルの中、薄暗い部屋に高速でキーボードを打つ女性がい  
た、傍らには一角獣の造形がされた白銀の腕輪が各機器に取り付け  
られていた。

コンコン・・・・・・

とその部屋のドアがノックされる、ここに来れる人間など限られる。  
自分を捕まえようとする政府の人間か自分の知り合いか

「ん？シャルちゃん？　だよね入ってきてー」

「あ、はい！」

「やあやあ、シャルちゃん元気にしてた？　いっくんとキスくらい  
した？」



は頼みますよん。」

「はい！　ならこれもう持って入ってもいいんですか？」

「武装追加の手順は一応マニュアル入れといたから大丈夫だよー」

待機状態のユニコーンから各配線を外し、シャルロットに渡す。触れた瞬間、淡く光りだす。

「わ、わわぁ・・・これ光ってますよ？　僕の暁でもこんな反応してなかったのに」

「基本フレームに全部サイコフレーム使ってるからね。これくらいの反応しても可笑しくはないよ。久々に、NTに触れたから過剰反応してるのかもねー」

「久々にですかまるで人間みたいに言うんですね」

「ISは生きてるからね。それにこれは他のは違うから・・・ね」

「？？　そろそろ、時間なんで行きますね。束さん」

「うん、IS学園の入学式遅れないようにねーいってらっしいー！」

「はい！」

そう送りだしてから、再びPC画面に目移す束、そこにはIS・Dシステムと映し出されていた。

「ユニコーン、サイコフレームをもって神になろうとする可能性の獣、相応しい乗り手を得れば、無二の力を発揮する。白騎士の伝説をも塗り替えるほどの・・・」

結局、自分はサイコフレームとはなにかわからなかった。だからこそ、サイコフレームを具現化する物を作った。そして、太陽の心臓も得ただから・・・

「さぁ、見せなさい人類の革新を！ユニコーン！　来るべき対話の

ために！」

## プロローグ 世界を覆う光、次世代の始まり（後書き）

同じことを考える人が多すぎてワラタって感じですが、この作品はシャルメインでハーレムENDのつもりです。束さんの口調が相当難しい・・・真面目に話してる最中は黒いほうのゆかりんボイスを脳内再生してしてください、ではノシ

## 第1話 クラスメイトは全員女（前書き）

一話目になるんですけど、原作メインだと全然話が進まない・・・

OTZ

早く、ユニコーンを出したいのに

## 第1話 クラスメイトは全員女

「はあ、はあはあ、け、結局遅れちゃったよ・・・とほほ」

僕、シエルロット・織斑はIS学園に入学することになった。フランスの代表候補生なんだけど・・・束さんのお使いで新型のマニユアル読むのに熱中しすぎて、電車に乗り遅れるなんて・・・一応、遅れるかもって千冬さんに言っているから大丈夫だよ・・・？

「一夏と一緒に学校に行きたかったなあ・・・まあ、男装してくんだから部屋とは一緒だよな！」

本来、ISは女性にしか使えない最強の兵器、ISは一機だけでミサイルを2000発も迎撃して見せ現行の近代兵器も物ともしない超兵器。その流れから男卑女尊の世界ができてあがるのは自然の流れだったんだと思う。でもその中、一人の男性がISを動かしてしまった。その人の名前は、織斑一夏・・・僕のす、すきな・・・

ボン

「あわわ、僕はなに言ってるの！ こんなことしてる場合じゃないのに！」

「そうだ、束から連絡が来ていたのに遅いからなにをやっているのかと思ったら、こんな所で悶えてなにやっとなんだ、この馬鹿者が！」  
「えっ?!」

振り向き見えたのは黒いスーツを見事に着こなした、僕の保護者にして世界最強のIS操縦者、織斑千冬が出席簿振り下ろす姿だった。

「全員揃ってますねー。それでは、SHRはじめますよー。」

黒板の前でにつこりと微笑む女副担任の山田麻耶先生、上から読んでも下から読んでも「やまだまや」、これは覚えやすい。まあ、それはいいとして、問題はその見た目、背は低く生徒達と対してもほとんど変わらない、俺も中学でたばっかの高校生だけど、あの先生は高校生かも怪しい・・・服はサイズが合っていないのかぶかつとしてる。そのせいでさらに小さく見える・・・労働基準法に喧嘩売ってる気すらする。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」  
「・・・・・・・・」

けれど、教室内は変な緊張から返事は返ってこない。

「じゃ、じゃあ自己紹介から始めますね」

うろたえながらそう言う先生に、俺くらい返事をしたいが、生憎それができるほど余裕がない。むしろ、こっちが助けてほしい。分かっていたといえ、これはない。俺以外のクラスメイトが全員女、まだ来てはない男性徒がいるが、実際は男装少女。

俺は神に見放されたのかぁーーーーー

つと嘆きたいところだが、まあ、知り合いがいるだけましなんだろうが・・・・・・・・

予想外だったのが、知り合いがもう一人いたことだろうか・・・  
そういつて窓際を見る。

「・・・・・・・・」

救いを求めるための視線だったが、薄情なことに幼馴染である篠ノ之箒はふいつとそっぽを向いてしまっ、これが六年ぶりにあった幼馴染に対する態度だろうか、てか嫌われてたりするのか・・・？

「・・・くん、織斑くん！」

「っはい?!」

いきなり声かけられたせいで声が裏返ってしまった。案の定、周りの女子に笑われるし、もつと緊張するじゃないか、席も最前列の中央つてのもあるんだろうけど視線があつまって思った以上につらいし・・・

「あ、あのッ、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるよね、あああああ、どうしよう・・・あのねっ、自己紹介が織斑くんの番なの、・・・・・・・・だっ、ダメかな？」

ものすごく申し訳なさそうに、ぺこぺこ頭を下げる。こっちが罪悪感が沸いてくるんだが・・・まあ、自己紹介を

「そんなに謝らなくてもいいですってば、自己紹介はしますから」「ほ、本当ですよ、嘘じゃないですよね？」

がばつと俺に詰め寄る山田先生、てかそんなに信用ないのかね・・・ってかまた視線が視線がい、いたい。とりあえず、席を立て後ろを見る、っぐ・・・なんという背中越しでも視線は感じてたけどこれはき、きつい・・・薄情にも、さっき見捨てられたはずの箒の視線も感じるし。ここはさっさと自己紹介を終わらせるに限る！

「織斑一夏です、一年間よろしくおねがいします！」

そついつて礼儀正しく礼をするが………ってえ?! なんだその期待に満ちた視線は期待してもなにもでないって! でもここになにも言わなかったら、暗い奴つてレッテルを貼られるんだろうか、それはごめん被る! 束さんからもらったISのゲームの話でもするか? でもアレはだめだ、ミッションとかフロム脳過ぎて誰もついていけないかもしれない! そもそもあれの操作方法がヘッドギアつけて脳波が云々とかわけが分からない操作方法な上にISよりもSF過ぎる装備だらけでネタすぎる! ああでもVOB着けてスピリットオブマザーウィルに突っ込むの楽しかったなあ、あんなISあつたら乗ってみたいよなあ……

「織斑くん……?」

「っは、すみません、考えごとしてました!」

俺の頭の中がフロム脳になってたぞ! 気付けないと……と、とりあえず何か言わないと、俺は深呼吸して言う

「以上です!」

がたたつ! ドリフ見たくすつこける女子は数人いた。どんだけ期待してるんだよ。IS学園より吉本行った方が良くないか?

スパーン 痛さより、凄まじいデジャビュ……この威力、速度、角度、もしかなくてもあの人……てか、本人ですよねえ!

「………」

おそろおそろ後ろを見ると、黒のスーツにタイトスカート、す

らりとした長身、よく鍛えられているがけして、過肉厚ではないボディライン。組んだ腕、狼を思わせる鋭い吊り目

「シャミア・ラヴィラヴィ?!」

パンツ!とまた叩かれた、これで俺の脳細胞は何個死滅したか、ちなみにかかなり痛いんですけど・・・音が大きすぎるせいか、女子が引いてるし・・・

「誰がアルゼブラの蜘蛛女だ! 馬鹿者」

背後にレッドラムのスタンドが立ってる気がする。闇討ちがああああー

AMSから、光が逆流する!! ギャアアアアツ!

「今度はフラジールか!」

ゴン! 角ががああ凄く痛いノオオオー  
うずくまったまま頭を抑える俺、思考を読むなんてエスパーか!  
つて、そんな脚を振りかぶってま、まさか・・・

「いたあー蹴ることないだろ千冬姉!」

「さつさと立て!」

「あ、あのー織斑先生、遅れてくるって言ってた子、向かいに行っ  
たんですよね。どうでした?」

山田先生が完全に引いてる、それに涙目、こんな所見ればそうなる  
か・・・

「ああ、山田くん、一応いたことはいたがな、なぜか悶えていて見

苦しいことなかったぞ」

「は、はあ」

「千冬さん！そんなこと言わないでくださいよー」

「お・り・む・ら先生だ！」

あ、また出席簿が・・・やっぱシャルだったかでもなんで悶えて??

「あう?! いたいじゃないですか。」

「ふーどいつもこいつも馬鹿者ばかりか、先が思いやられる・・・  
デュノア！ お前もさっさと自己紹介を済ませろ！」

よほど痛かったのか頭を押さえ涙目で俯いてるシャル、仕草がほとんど女の子だけど男だって誤魔化せるのかな、俺にはただ男子用の服着てるだけにしか見えないけど・・・うん、いつものシャルだな！

「シャルはやっぱ笑ってる方が俺は好きだぞ、早く自己紹介すまそうぜ？」

「え?! すすす好きつていー夏?!」

真っ赤になっちまって、そんなに緊張してるのか?? あ、あれ、後ろに般若は見える・・・

「織斑先生・・・?」

「織斑、デュノア・・・あとは無いぞ、さっさとしろ」

地獄から響く鬼の呻き声、そんなことが思いついた・・・

「うつひっく、ううう。あ、改めてデュノアさんに自己紹介しても、

貰おうと思いませんウ」

さっきの千冬姉の殺気に当てられて山田先生が本泣きしていた、本  
当なら、二人目の男子のIS操縦者って言ったら大騒ぎされそうだ  
けど、皆、顔が引きつってる。そういう俺も頭痛が痛い、日本語可  
笑しいけどとりあえず痛い……

「は、はい……シャルル・デュノアです。フランスから来ました。  
この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしく  
お願いします」

さっきのを引きずってるかと思っただけど、案外持ち直すの早いなあ  
ー 普通ににこやかな顔で礼してるし

「男の子……だね？」

誰かがそういった、ん？ さっきまで死んでた空気が

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて入学を――」

人懐っこいような顔、礼儀正しい立ち振る舞いと中性的に整った顔  
立ち。髪は濃い金髪、黄金色のそれを後ろで丁寧に束ねている。体  
はともすれば華奢に思えるくらい……華奢に決まってるけど女の  
子だし、まあ男だったら美少年だろうな！。印象は『貴公子』って  
いった感じかな、元々素直な性格だからまったく嫌味のない笑顔が  
いいよな。

「きゃ……」

「ん？？」

「きゃあああああ――」

生き返りたいや、なんだこの活気?! 空気が震えてると・・・

「男子! 二人目の男子!」

「男の娘だわ!」

「美形で守ってあげたくなる系の!」

「地球に生まれてよかった!」

地球って大げさな、てか一人字が違つような・・・こんだけ騒いでも他の教室から誰も来ないって教員の皆さんご苦労様です。

「あー騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬姉が言う、元々こういった女子の反応が鬱陶しいんだろう。

「ああ、山田くん。クラスへの挨拶任せてすまない。」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・」

だいぶ落ち着いてきたみたいで、ニツコリとはにかんだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使いものになる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことは良く聞き、良く理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんという暴力宣言、どこからどうみても俺の姉、千冬姉だな。だがしかし、困惑のざわめくきでわなく、黄色い声があがった。

「キヤ——！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導頂けるなんて嬉しいです！」

「お姉様のためなら死ねます！」

スッゴイ人気だよな、でも当の千冬姉は鬱陶しそうにしてるけど。

「よくも毎年、こつ馬鹿者ばかり集まるものだな、それが集めていくのか？」

本気でそう思ってるのが千冬姉だからなあ、人気は買えないんだから大切にしようぜ？

「もつと罵ってええー——」

「でも時にはやさしくして——」

まあ、もう少し自重しないかと、言っても無駄そうだけど、こんだけ騒がれると逆に落ち着くよただでさえ千冬姉がここの教師ってさつき知ったばっかだし。

「それで、お前はちゃんと自己紹介もできんのか」

「いあ、千冬姉、俺は・・・」

「織斑先生だとさっき言っただけだか？」

「はい！ 織斑先生」

このやり取りがよくなかった、さつきは千冬姉の殺気で誤魔化されただけ今度、姉弟ってばれた・・・？

「え・・・？ 織斑くんって、あの千冬様の弟・・・？」

「それじゃあ、世界で唯一男でISを使えるって言うのも、それが関係して……」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

最後のはほつとくとして、一言言つとくと、逆の立場なつてみると思っただけだな、ん？

なんか低温な視線が、ふと視線があつた方をみたら、少し怒り顔の筈と目があつた。またプイッとそっぽを向かれたけど、なにこ怒らせるようなことしたっけ???

あとで聞けばいいか……

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後、実習だが基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

千冬それじゃ全く選択肢ないんだけど、どっかの軍隊ですか……？

## 第1話 クラスメートは全員女（後書き）

ストーリーの大きな違いとしてシャルが一夏、箒と共に入学しています、そしてシャルは原作開始前に知り合っており、ファースト、セカンドと続いて、サード幼馴染となっています。まあ、だから原作と違い、何個かイベントなくなる予定ですけどね・・・？

## 第2話 クラス代表決定戦（前書き）

すみません、ユニコーン出るとこまで行こうと思ったんですけど、途中で切ります。P V 5 , 1 4 6 ユニーク 1 , 4 9 3 多くの方が見てくださったみたいでまだ二部しかないのにありがとうございます。

でわ、I S 太陽の心臓と可能性の獣はじまります。

## 第2話 クラス代表決定戦

「あー……」

マズイ、まいった、そして疲れた。一時間目のISの基礎理論授業、なんとか終わったけど、あの電話帳並みの必読のIS基礎入門編の参考書捨てちまって、シャルに見せて貰いながら一応覚えただけど。PICとか慣性制御？だっけ原理教えて貰っても全く分からん。そもそも、ISってどうやって浮いてるんだ？

それに、ちらつと近くの女子に視線を向けるけど、それまで向けていた視線をそらす『話かけてきて！』ってオーラを感じるが、とてもそんなことできる精神状態じゃない……

「なんか、お疲れ気味だね。一夏？」

「おお、シャルか俺にはお前しかないよ！」

「へ？ わわあ、ほ、ほんとに参ってるね」

俺は、シャルの手を掴んですがり着いたけど、俺の必死さからシャルが引いてる。でも俺もこの環境は耐えかねてるんだ。男（男装女子）が一人いるだけでまだましである。てかなんで、男装なんてしてるんだろ？ 小さいころ、家の都合から世界初の男性IS操縦者として矯正されてたのは知ってるけど、なんで今更って感じがするんだが？

まあ、深くは考えまい。

「ちょっと、いいか？」

「……？」

誰に声かけてるんだろうと思ったけど自分か、いい加減痺れを切らした女子の一人が、話かけて来たんだろう、それで振り向いてみたら・・・

「・・・箒？」

「篠ノ之箒さんだっけ？」

「・・・」

目の前にいたのは六年ぶりにあった、幼馴染だった。篠ノ之箒、幼いころ通っていた剣術道場の娘、今も昔も御なじみなポニーテールで黒く長い髪を後ろで白いリボンで結んである、白いのは神主の娘だからだろう（篠ノ之道場は神社兼任）

身長は、平均的女子ほどだが、剣術をしているからなのか細身で、背が高く見える。少し不機嫌そうに見えるのは本人曰く生まれつき、俺が嫌われてる可能性も捨てきれないけど、さっきも名前で呼んだら睨まれたし。昔から日本刀を思わせる雰囲気だったが、今はさらに鋭さが増している気がする。

「廊下でいいか？」

「一夏でいいんだよね？」

うあ、綺麗な子だ。なんか、一夏と知り合いみたいだし要注意人物かな。うん！

「・・・ああ」

教室で話にくいことなのかとりあえず、今この状況から抜け出せるならなんでもいい。持つべきものは幼馴染だな。薄情なんて言ってすまんかった、言ってないけど。

てか、俺にか

「早くしろ」

「お、おう」

そうして、廊下に出るが結局聞き耳立てている女子がいるのは変わらない。これじゃ教室でも変わらないんじゃない？ てか見事に集まっていた女子が道を開ける劇団四季のエキストラ並みに綺麗な分かれ方だったああ見事だよ。だから聞き耳立てるのは辞めてくれ。

「そういえば・・・去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「・・・」

ふと思い出して話題を振るつもりで言ってみたけど、なんで口をへんの字にして赤くなってるんだ。なんかまずかったのか？！ 褒めたと思うんだが。

「なんでそんなこと知ってるんだ。」

「なんでって新聞で見たし・・・」

「なんで、新聞なんか見てるんだっ」

意味不明すぎるぞ、箒。新聞くらい普通に読ませてくれよ・・・久しぶりだけ口調がサムライってか、男っばいよな。

「あーあと、」

「なんだっ!？」

「・・・」

「あ、いや・・・」

自分の剣幕に気が付いたのか、バツの悪そうな顔する筈。 でもな  
んでそんなに興奮してうるんだ？

「久しぶり。六年ぶりだけど、筈ってすぐに分かったぞ」

「え・・・？」

「ほら、髪型一緒だし」

そういつて、俺は自分の頭を指すと筈は自分の髪を弄りだした。

「よ、よく覚えているものだな」

「いあ、忘れないだろ、幼馴染のことくらい」

「・・・・・・」

ギロリ。また睨まれた、忘れるよりはいいと思っただけど、なぜだ。

キンコーンカーンコーン

おっと時間が、さっさと戻らないと。

「俺達ももどろうぜ」

「わ、わかっている。」

ぶいっつと顔を背けて先に行く筈、どうやら機嫌を悪く。

何かやったっけ本当に思い付かないんだけど・・・

二時間目は千冬姉と山田先生の授業だった、一応参考書の内容見た  
からある程度は理解できたが、が！ ある程度ね・・・・・・そし  
て三時間目

「再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなければなら

ない。クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。」

ざわざわと教室が色めき立つ、クラス対抗戦?? まさか、体育とかのドッチボールとかスポーツ関係? 年の初めってそういうのがあつたりするよな。

「はい! 織斑くんを推薦します。」

織斑か、クラスにもう一人いたのか? それは奇遇だ。

「あ、なら私は、デュノアくんを推薦します。」  
「っえ? ぼ、僕ですか?」

ああ、シャルなら別にいいじゃないかな、天然っぽい所あるけど素直で真面目だから案外しつかりやつてくれそうだし。

「では候補者は織村一夏、シャルル・デュノアの模擬戦を持って決める。他にはないか? 自薦他薦問わないぞ」

「っ俺かよ?! ちよっ、ちよっと待った! 俺はそんなのやら」

――

「自薦他薦問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「い、いやでも――」

「あはは、やっぱり拒否権ないんだ・・・」

まだ反論しようとした俺となにか諦めたようにしているシャル  
その時、突然甲高い声が遮った。

「待ってください、納得がいきませんわ!」

パンツと机を叩いて立ち上がったのは、確か自己紹介でイギリスの代表候補生だといってた。セシリア・・・なんだっけ？

「このような方法でクラス代表を決めるなんて間違ってますわ！  
大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか  
！？」

そうだ、もつと言ってやれ俺もやりたくないし・・・あれ？

「實力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを極東と意地汚い国の猿にされては困ります！ わたくしがこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！ 大体、文化としても後進的な国でくさなくてはいけないこと自体、わたくしには耐えがたい苦痛なんです  
！！」

あれ？ 俺、人じゃなくなってる。それにシャルのことまで馬鹿に、いい加減しろ！！！！

「僕のことを言うのは構わない、だけど一夏のことを悪く言うのはやめて。それに、イギリスだって大したお国自慢ないじゃないか、世界一美味しくない料理で何年一位取ってる？」

あのシャルが底冷えのするような声出しながら、セシリアを立ち上がり睨みつけていた。

こ、こんなに怒ってるシャル見た事ない・・・さっきまで頭に血上ってたのに覚めちゃった。

「あ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの？！」

「あそこまで言われて怒らない人間はいないと思うぞ、いいたいこと言ってくれてありがとうな、シャル。」

「一夏……」

「あなたもですか？！ もう決闘ですわ！」

あーもう、こうなったら仕方がない、なるようになれだ！

「おう、いいぜ。 その方が手っ取り早いしな！」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら、わたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。 真剣勝負で手を抜くほど、腐っちゃいない」

「そう？ 何せよ、ちょうどいいですわ。 イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね！」

勝負することになったはいえ、男が本気で女子と力比べをするわけにはいかないし、どうしたもんかね。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけばたらいいのかなーと」

そこまで言ってクラスからドツと爆笑が巻き起こった。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

みんな本気で笑ってるいる。——しまった、そうだった。 今、男は圧倒的に弱い。 腕力は何の役にも立たない。 ISは一部の人間

しか使えないが、女子は潜在的全員使えるのだ。男子は原則ISを使えないし。

「じゃあ、ハンデはいいい」

「あ、ちよつと待って一夏！」

「ん？ どしたシャル？」

それまで静観していたシャルが手を上げて言う、まあ律儀に手を上げるところがシャルっぽい。

「このままじゃ、戦いにならないよ。セシリアさん相手なら、こっちがかなりハンデつけないと戦いにならない」

「な、なにをおっしゃってるのですか？！ あなたは気でも狂いましてか、それともそこまでわたくしを愚弄する気ですか！！」

怒髪天を衝く、そういつてもいいくらいの怒りをセシリアが見せていた。その元凶となったシャルは涼しい顔をしている。シャルは女だからいいかも知れないけど、俺はハンデありくらいの方がいいじゃないかと少し思ったんだけど――どこからくるんだその余裕。

「気なんて狂ってないよ、そっちは試作段階の第三世代型。こっちは、第四世代型の初期ロットの高性能機と同じ世代の完成系。日本のことわざで月とすっぽんだっけ、それくらい違うよ？」

第四世代？？？ 教科書に載ってたのって第三世代までしか載ってなかった気が、というか、俺のISも入ってるのか見た事もないのに

「やはり気が狂っているようですわね。第三世代が試作段階なのですよ？ それが、第四世代とは甚だ可哀しいですわ！」

「ちょっと待て、デユノア。お前の暁は分かるが、織斑の専用機が完成したとは聞いてなかったぞ。もうアレの搭載までしてあるのか？！」

それまで黙っていた——なんで黙ってたんだ……。こんだけ言いやっていたら出席簿が舞うはずなのに、俺には全然分からないけどシャルも千冬姉もなに知ってるんだ？

「はい、一夏のユニコーンも一応完成してます——ほら」

そう言っただけの近くまで来てユニコーンそう言っていた通り銀の腕輪に一角獣の装飾をしてある。綺麗な腕輪が俺の手に収まる。

「あ、ありがとシャル……」

「いえいえ」

「せ、専用機ですって？！彼は最近ISに乗れるのが分かったばかりではなかったのですか？！」

「世界で一人だけの男性操縦者だ。情報収集のためにも専用機の使用することに決まったんだ。それに、第四世代に関しては開発には私も参加している。」

千冬姉の一言から元が冗談をいわない人だから、嘘ではないと分かる。

本当にあるのか第四世代、あまりのことに驚き唖然としていた女子たちが、

息を吹き返す。

「せ、専用機？　こんな時期に！」

「すごいよ、織斑くん！」

「私もほしいなあ——」

「それより、第四世代ってなに??」

羨ましいという意見から最後にもっともな疑問があっただけど、俺が知りたい

「もう、なんなんですよー」

「オルコット、もしアレが私の知っているスペックと同じならお前に万の一つも勝機はない、大人しくハンデを貰っておけ。」

「お、織斑先生まで?! そんな物はいらないですわ!」

「なら、勝手に決めるぞ。デュノア、お前の方はどうする?」

そう言われきょんとしているシャルが気付いたのか、返事を返す。

「僕からの攻撃は一切しません。それで30分間、僕がのこっていたら、勝ちでいいですか? オルコットさんもいいですか?」

慢心してるわけではない、ただ明日の天気聞くかのように気軽気聞く。セシリアはあまりの条件に呆然としていた。沈黙を肯定と受け取ったのか、今度は俺に尋ねる千冬姉。

「うむ、織斑の方はどうする。」

「あ、あのーそもそも、ISの性能がわからないんですけど・・・」

「ああ、そうだったな。デュノアどれくらいが適切だ?」

「シールドエネルギーが3分の1以下になったら負けでいいと思います。」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は三日後、第三アリーナで行う。織斑、デュノア、オルコットはそれぞれ用意をしておくように。」

三日? さ、さすがにそれだけで勝てるのかいくらなんでも短すぎ

る。でも、このユニコーンを俺より知ってるはずのシャルは文句言  
わないしどつすりゃいいんだよ……！

## 第2話 クラス代表決定戦（後書き）

もう何度か、シャルのISの名前が出てますがラファールではないんですよね。オリジナルのISで名はその本性を現す。そういえば分かる人には分かると思います。

次回はユニコーン及び暁の登場です。次回「ユニコーンの日」

### 第3話 ユニコーンの日(前書き)

今回で、UC登場まではいきました、が！ 戦闘シーンは次に持ち越しです。すいません  
オリ用語などがある程度出てくるのでそのうち設定集も作ります。  
でわわ、はじまります。

### 第3話 ユニコーンの日

「うぐ、もうだめだ。シャル、千冬姉に伝えてくて先立つ不幸とお許しくださいとな……」

「っちょ、ちよつと、一夏逝っちゃダメだつて?!」

ぐったりとしている俺を、かなり必死に揺さぶるシャル。実際、そう言いたくなるくらい疲れたんだよパトラッシュ……放課後、授業はこれにて終わり。皆帰って行った中、俺は力尽きていた。初日なのに一週間くらいたったんじゃないかと思うくらいの濃さだった気が、そもそもこんなに女子に囲まれてのはすごく疲れる。

「まあ、それは冗談だとして、ここつて全寮制だったよな」

「あ、うん。部屋割りまだ聞いてないけどそのばすだよ?」

「シャルさん、たしかパンフレットには二人部屋だった気がするんだけど」

「そうだね」

「男二人だと絶対一緒になると思うんだけど……」

「そ、そうだね……」

「問題あること……ないか?」

シャルがうちに来てから一年は経ってるけど、さすがに部屋も別だったしうれしはずかしなイベントもなかったという健全な学生生活だったけどこ、これはどうすりゃいいんだ?!

「その、いやかな……僕と一緒になんて。」

「いやとかそういう問題じゃ——」

「ごめん、やっぱり迷惑だよね。一夏」

目をつるつるとさせ俯くシャル、なあこれ新手のいじめだろうか。  
拒否権なんで初めからなかったんだ！！こ、これはどうしようもない  
というか、ゴジラに睨まれた蛙つくらいどうしようもないの  
か・・・？

「ああ、二人ともまだ教室に居たんですね。」

「はい?!」

「あ、山田先生」

話しかけられ、誰かと思って振り返ったら。副担任の山田先生が書  
類を片手に立っていた。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました。」

「今日是用意があるから無理じゃなかったんですか？」

「僕も一緒だから一部屋用意するのに時間がかかるって話だったよ  
ね」

「それが、事情が事情なので無理矢理部屋割りを変更したみたいで  
す。政府特命もあって、とにかく寮にいれるのを優先したみたいで  
す。」

マスコミとかどこの研究機関が「今の心境はどうですか？」とか  
「君の体を調べさせてほしいのだが」とか家に帰ったら言われるの  
が目に見えてるから入るならありがたいけど。

「でも僕達、荷物の用意してないんですけど。」

「そうだな、一応まとめてはあるけど取りに家に帰っていいですか  
？」

「あ、いえ荷物なら——」

「私が手配しておいてやった、ありがたく思え」

ああ、この声、絶対千冬姉だよ。すでに俺の中ではダースベイダーの曲が流れていた。

「「ありがとうございます・・・」」

「まとめてあつた荷物だけだが、あとの不足分は自分で用意するがいい。」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年用食堂で取ってください。ちなみに、各部屋にシャワーがありますけど、大浴場もあります。えっと、その二人は今のところは使えません」

「え、なんで？」

「一夏、女の子と一緒にいる気なの・・・」

「あ！ いあ、そんなことはないぞ」

あれえ？ 心なしシャルを中心にして底冷えするような寒気が・・・

「デユノアがいるのなら、間違いは起こさないと思うが、アホかお前は。」

「だ、大丈夫ですよ？ えっと、私たちは会議があるので、これで、二人ともちゃんと寮に帰るんですよ？ 道草くっちゃダメですよ？」

「少し二人に用があるんでな、山田くんは先に行っていてくれ。」

「そうですか？ では、お先に失礼しますね。」

千冬姉が、山田先生を先に行かせて。その場には、俺、シャル、千冬姉だけ残った。

「シャルロット、わざわざ男装して通うことになって理由話してもらうぞ。一夏お前にもかかわる話した、良く聞いておけ。」

「はい、理由ですね。」

あれほど、言い方を変えていたのに。シャルの本名を出すなんて、教師としてじゃなくて、織斑家としての話だって分かる。男装の話か、俺も疑問だったしな。

「IS学園に入学する前に、少し呼び出されたんですよ。」

「そういえば、手続きがあるとかでフランスに戻ってたな。」

「うん、その時に僕が束さんや一夏と懇意にしているからって探ってこいってね。今さら呼び出しといて、そんなこと言われちゃったんだ。」

「大方そんな理由だと思ったが、だがデュノア家とは話しが付いたと思うが？」

昔、ISの世界大会である。第二回モンテ・グロツソでシャルと出会って。その時、俺が誘拐された。シャルはその巻き添えとして一緒に連れ去られた。そのあと、千冬姉が決勝戦までいったのに抜け出してまで俺達を助けにきてくれたんだ。シャルとはそれ以来手紙でやりとりしていた。その手紙の中で、家族から便利な道具のように扱われてるって分かって、それを千冬姉に言ったら。とんとん拍子でシャルが家に引き取られるよう決まったんだ。まあ、引き取られたのは最近だけだ。

「たしかに、そうなんですけど。フランス政府もその話しに乗って来て断れなくなっちゃって・・・」

「なら、束にでも話して見るか？」

「いえ、もう束さんには話したんですけど。今のうちに適当な情報流して、恩の売っておけばって話で。あははは」

「束さんらしいのかなー」

「そうか、束なら何かしら手は打ってるだろうしな大丈夫だとは思うが」

実際は、恩を売っておけばつと云うようにに薦めたんだろうな。大方、男の方が一夏と一緒に居られるとでも言ったか？ 面白半分でこのようなことしよって・・・まあ、この調子なら深く考える必要はないな。

「話はこれだけだ。二人ともさっさと部屋に行くといい」

「あ、はい！」

「また明日、千冬姉！」

千冬姉が教室を出て行くのを見送る。

でもなあ、二人一緒に部屋に入ることになって噂してたらさらに早まるとは・・・

「じ、じゃあシャル部屋にいくか・・・？」

「一夏、嫌なら嫌っていいんだよ・・・」

そんな泣きそうな顔で言うなよ。たしかに問題あると思うけど、まあシャルだし大丈夫だと思うしな。

「嫌じゃないさ、シャルがいいならって話だ。どうだ？」

「え、いいの？ 僕ならいいから！うれしいよ！」

そういつて、さっきまで泣きそうな顔だったのが、花が咲いたような笑顔に変わった。

はて、男と一緒になんて気が休まらないと思うけど、なんでそんなに嬉しそうなんだろ？？

「なあ・・・」

「・・・」

「なあつて、一緒に食べに行かないか？」

「勝手にいけばいんじゃないか」

「篠ノ之さん、できれば一緒に食べない？」

「・・・ふ、ふん、一夏がどうしても言うなら行ってもいいぞ」

「おお、そうか！」

「あはは、分かつてるのかな？」

「なにがだ、シャル」

「・・・いや、いいよ気にしないで」

「？」

ちなみに今は入学式翌日の朝六時、昨日はさつさと部屋の準備やらシャルからISの説明やらを受けていた。ちなみに部屋だが1026号室で箒の部屋と隣だった。そのよしみで朝食に誘ったのが、ぎよつとして逃げられたから再度のチャレンジだったわけだが成功しましたよ。ちなみに俺と箒と一緒に和食セット、シャルは洋食セットとなつてゐる。

「箒、これうまいな」

「・・・」

無視された。が、賛同するように箒も鮭をつまんでいる。

「なあ、箒——」

「な、名前で呼ぶなっ」

「篠ノ之さん」

「・・・」

「篠ノ之さん、苦労するね」

「・・・箒でいい」

「うん、箒さん」

「なぜだ」

名前を呼ぶなと言うから名字で呼んだら、今度は今度でむすつとしました。

でも、シャルの受け答えは普通してるのに、俺って嫌われてる？

「シャル、昨日言ってた。装備って本当にあるのか？」

「相転移装甲とエフィールのことね。今、調整してるから使えるはずだよ？」

「それはいいけど、俺がやってるMMOと同じ装備があるんだけど・・・」

「へ？！ 偶然じゃ、ちなみそのゲームの名前って？」

「NEXTIS、フロムと束さんの共同開発のMMO」

「っ？ 姉さんはそんなことしてるのか」

「あ、ああ、俺は中一の頃にそのゲームのオフライン版渡されてやってるから時々束さんが直接ミッション依頼してきたりもするんだぜ？」

ちなみにこのゲーム、ISとネクストの共存をテーマとしたゲームで新ハードヘッドギア「AMS」の御蔭でかなりのリアリティーのあるゲームでまるでその場でネクストやISを操縦しているような映像と仮想五感フィードバックによって香りや熱、味まで再現してる。

ちなみに搭乗するというより、その機体になるという設定。男性がネクスト、女性がISと決まってるから当然、俺はネクスト乗りだったりする。IS乗れるようになったから乗れるようになるのかね???

「やってみるか？」

「興味ない。織斑、私は先に行くぞ。」

「あ、ああ、また後な」

さっさと食事をすませた箒は立って行ってしまった。

俺と箒は幼なじみだ。小学校一年の時に千冬姉の付き合いで剣道場に通うことになってから、四年生まで同じクラスだった。初めは仲は悪かったが、同じ剣道をする同士ということで次第に打ち解けていったと思う。（気がする）

「箒さん、行っちゃったね。それでさっきのだけど、単に束さんが同じ名前使ってるだけじゃないの??」

「やっぱ、そうなのかね」

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

千冬姉の声が良く通る。このIS学園のグラウンドは一周は5kmある。十周なんてしたらフルマラソン並みに走ることになる。まず死ねるな。

放課後、シャルに聞いたらまだ、ISは用意できないとのこと。ぎりぎりクラス代表決定戦には間に合うらしいけど、それで――

「どういうことだ」

「いや、どういうことって言われても」

気分転換に散歩していて道場前に来て、素振りをしている。箒がいたわけで、当然声をかけたわけだが……

「どうしてここまで弱くなっている?!」

「受験勉強してたから、かな？」

「……中学では何部に所属していた。」

「帰宅部、三年連続皆勤賞だ」

こうして、久々に打ちあいをしないかと言われやっではみたが、ブランドのせいも全くついていけないわけで、それが気にいらぬのかご立腹な箒

「――なおす」

「はい？」

「鍛え直す！IS以前の問題だ！私が稽古を付けてやる！」

「え。それはちよつとISのことをだな」

「だから、それ以前の問題だと言っている。」

すつこい怒ってる。結局、その日は帰るのが遅れて心配してシャルが来るまでずっと稽古というなのフルボッコにあつてました。どうしてこうなつた！

そして、翌日、セシリアとの対決の日

「――なあ、箒 シャル」

「なんだ、一夏」

「なに、一夏」

あれからどういった心境の変化あつたのか知らないが箒が名前で呼べばいいと言われたのでそうしてるが……

「気のせいかも知れないが」

「気のせいだろう」

「気のじゃないかな」

そう、一つ問題がある。

「ISの基礎と俺の専用機の簡単な説明だけでどう勝てばいいと？」

「あ、あはは、昨日二人で稽古してたから最適化処理と初期化終わってないし」

「うぐ、わ、私のせいにするのかシャルル?!」

「出来てても数時間違っただけだよ。」

「そうだなならよかった。」

そう言われ、ほっと胸を撫で下ろす筈。まあ、どちらにしても三日だからどうしようもないか・・・

「結局、シャル勝算あるの??」

「ごめん、正直当てにしてた、エフィールド発生装置付きの盾が間に合わなかったんだ。」

「エフィールド発生装置、それはなんだ?」

「対エネルギー攻撃用の防御フィールドだよ。簡単に言えば」

「もう、間に合わなかったのは仕方がない。」

俺の戦い方は近距離での格闘戦、幸い、雪片式型とビームサーベルが四本があるらしいから戦えるだろう。(ゲーム内での話しだけど)雪片式型は千冬姉が使っていた暮桜の装備雪片の発展型らしい、実際に使ってみないとわからないが、よい剣なんだろうな。

「用意は終わったか? 終わったならば、さっさと装着しろ」

「千冬姉・・・」

パン!

「織斑先生と呼べ。学習しろ、さも無ければ死ぬ」

うお?! なんか殺気だってるような、何度も間違えてるからか?

「分かっているなら学習しろと言っている。馬鹿者が」

読心術。千冬姉にはあらゆる意味で敵わない。

「お、織斑くん。アーリナの準備は終わりましたので、織斑くん待ちですよ?」

「織斑、すぐに準備しろ。アーリーナを使用できる時間は限られているのだからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

「この程度の苦境日本男児なら乗り越えて見せる!」

「一夏ならきつとやれるよ。がんばろう!」

「——え? えっと、なん・・・」

「「「早く!」」」」

四人の声が重なった。

俺の周りのにはこういう異性しか以下略

ピット搬入口がごごごっという鈍い音がして開くその先にはIS用のカタパルトと広い空間があった。

「デュノア、専用機の準備を」

「あ、はい、分かりました。IS『ユニコーン』マニュアル展開開始」

シャルがそっくり、持っていた情報端末でなにか操作をし俺の身につけていた。待機状態のユニコーンが光輝き、俺の体を覆ってゆく溢れる光の粒子は徐々に形作られていき。それは姿を現した。

「GN-0006 ユニコーン 第四世代の最終ロットの機体だよ。」

初めは灰色の装甲を持っていたが。白く変わっていき、その姿を現した。

一角の角をあしらった。ヘッドギア、二つのビームサーベルの装着された腕部

バックパックのバーニア、そこからうつすらと緑色の光が漏れている。

俺がやっているNEXTIISの白式に似ている気がするのは気のせいだろうか。

腕部のサーベルの収納の仕方、バックパックに隠れるようにあるサーベルも

そして、カメラアイではなくなったとはいえ、一角獣を思わせる角だが違うことが、あるどこか懐かしい友人に会えたような感覚、ひどく懐かしい

そして、悲しさを感じる。俺は……

「一夏……？　なんで泣いてるの??」

「どうしたんだ?!　一夏、一夏!」

筈が驚いたのか必死になって俺を揺さぶる。その時になって何故か自分が涙を流していることに気がついた。

「あ、ああ、すまん。　ひどく懐かしいような、そんな感じがして・

……」

「そ、そうか?」

「大丈夫ならいいけど、なにか異常があったら教えてね?」

「ああ、大丈夫だ!　俺とユニコーンならやれるさ!!　千冬姉?」

千冬姉が、なにか苦虫を潰したような顔をしていた。どうしたんだ

ろうか

「あ、ああ、なんでもない。織斑、そのユニコーンに問題はないか？」

「問題はないけど、千冬姉方こそどうかしたのか？」

あ、まだ織斑先生って言い忘れ――

「気にするな、お前は目の前のセシリアのことだけ考えればいい。」

出席簿が舞うことはなく、ただ、硬い表情でそういった。本当にどうしたんだ??

「あ」

――戦闘待機状態のISを感知。操縦者セリシア・オルコット。ISネーム「ブルー・ティアーズ」、戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

何時も異常に感覚が研ぎ澄まされている気がする。千冬姉の微妙な変化、声の震えまで知覚できる。心配してくれてるんだな。

「大丈夫、千冬姉。いける！」  
「そうか」

ほっとしたような声。だがそれは、ハイパーセンサーでしか拾えないような微細な変化だった。

それとなく、シャルそして箒の方へ意識を向ける、だが目で見る必要はない。なにせ、センサーにより全天が認識可能だ。

「二人とも」

「な、なに一夏？」

「な、なんだ??」

「行ってくる!」

そついい、俺は二人に振り返らずに手を上げる。あとは前を向きただ往くのみ。

「ああ、行つて来い!」

「いつてらっしゃい、一夏!」

ユニコーンを少し前へ傾けただけで機体はふわりと浮かび、前に進む。

カタパルトに到着し、俺は前傾姿勢をとり。言う――

「ユニコーン、織斑一夏でる!!」

可能性の獣は、新たな空を舞う、織斑一夏という魂を得て。

### 第3話 ユニコーンの日（後書き）

次回にて新たに新型また出す予定、次はユニコーンの戦闘シーンです。

## 第4話 システムI S・D（前書き）

遂に、一夏初戦闘！ うまくユニコーンが書けているいるか不安です。

かなり改変されているので、後半が完全にオリシナリオ化仕上がりは見てのお楽しみで

## 第4話 システムIS-D

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふんと鼻を鳴らす。腰に手を当てたポーズが様になっている。

けれど、俺の関心はそんなところはない。そう、まるで一緒なんだ。NEXTIS、俺のやっているゲーム。脳波リンクによる思考制御、思ったとおりに動かすことができる高い操作性。その操作方法は実装された当初、あまりに機敏に反応するため扱いずらかった。ISプレーヤーのある一人がこう言ったそうだ。

『接続の仕方の差異はあるけど、まるでIS動かしてるのと変わらない』っと今の俺ならその言葉が理解できる。ただ、違いがあるとしたら、ゲームで使っていたのは全身装甲のネクストだったことだろうか。

鮮やかな青色の機体『ブルー・ディアーズ』。その外見は、特徴的なフィンアーマーを四枚背に従える。何処かの王国騎士を思わせる。それを駆るセシリアの手には2mを超える長大な銃器——検索、特殊レーザーライフル《スターライトmk?》と一致——が握られていた。ISは元々宇宙空間で活動を前提として作られているので、原則空中に浮いている。そのためか自分の背丈より大きな武器を扱うのは珍しくない。

「最後のチャンスをあげますわ」

腰に当てていた手を俺の方に、ぴしっと人指し指を突き出した状態で向けてくる。左手の銃は余裕なのか、下に向けたままだ。

「チャンスって？」

「貴方たちが言った大言壮語のハンデのことですわ。わたくしが一方的な勝利を得ることは自明の理、むしろハンデを負うのはわたくしではないのですか。いえ、ハンデと言わず今ここで謝るのなら惨めな姿を晒すことはなくなりますわよ！」

「ハンデがあつても勝てるくらいの勝率なんだろう？ それはチャンスとはいわないな」

「・・・あなたは！ 残念ですわ。それなら——」

——警告！ 敵IS射撃体勢に移行、初弾エネルギー充填。

「お別れですわね！」

キュインツ！ 耳をつくごくような独特な音。それと同時に走った閃光と同時に右ショートQBをし回避する。

来るとわかった射撃なぞ、怖くもなんともない！

「瞬間加速？！ な、なぜ、ISに初めて乗る方が使えますの！！」

「瞬間加速？ QBのじゃないのか？」

「知りもしないのに、なぜ使えるんですか！」

「ゲームで似たようなことしてからから真似しただけだ。」

そういつたら、セシリアは目を見開き睨み付ける。銃をこちらに向けながら、こちらに怒声を浴びせた。

「ふ、ふざけないでくれなくて！！ ゲームの真似したくらい瞬間加速できて堪えますか！ もう全力でいかせて貰いますわ！ さあ、踊りなさい。セシリア・オルコットとブルーディアーズの奏でる円舞曲で！」

射撃、射撃とまさに弾幕といつていい嵐のような攻撃が降り注ぐなか、QBとフエイントをかけた機動で避けてゆく、あれだけの大口径のレーザーライフルいくら正確に撃つていても一門だけじゃ射線を読むのは簡単だ！ どうせならソルディ奥斯・オービットの浮遊砲台くらい持つてこないこない限りは当たってはやらん！

「く、掠めたか、武器なしじゃどっちにしてもジリ貧か」

「当たらない！ あなた本当に初めてIS乗りますの?!」

「ああ、ISには初めて乗ったよ男の子だからな！」

「もう、わからないことを言う！ 行きなさいディアーズ！」

「なんだと?!」

さつき、ソルディ奥斯・オービット持つて来いつて言ったのが悪いのか！

ブルーディアーズの背面フィンアーマーから四つのビット兵器が射出され、こちらに追隨してくるかのように機動し、砲撃を開始した。

「10分、一度も当たってないですよ！ それに瞬間加速が使えるなんて・・・天才？」

山田真耶は、モニターに指を刺しながら心底驚いたようにいう。

「さきから、わざわざ射線を見てから避けている・・・様子見か、なにかを試すような奇怪な動きだな。」

一夏の動きは不可解なものだった、本来、ハイパーセンサーで視線などをやらずとも、射線を見ることはできる。それをできるだけ見ながら避けるようにしている。千冬のような熟練者から見ると不可解といつていい状態だ。

「でも、これだけ避けれるなら、攻撃に移れそうですね。兵装に異常があるのでしょうか、一度も展開してないんですね。どうしてでしょ？」

「いや、異常はないだろう。あれは基本装備に非実体剣を四本持っている。ただ展開してないだけだ。」

「非実体?! そんな装備があるんですか。」

真耶が驚くもの無理はない、ISの近接武器は基本的に実体剣であり非実体のエネルギー兵器なんてものは存在していなかった。

「第四世代の展開装甲だな、あれは一応基本装備だそうだ。それより、織斑は機体性能を試しているのではないか？」

「へ、どういことですか？」

「武器を出さずに、回避に専念する。時折、かなり大きく避けている。機体の加速力を調べているようにも見える。」

「ええ?! それじゃ、これがあの機体の全力じゃないってことですか!」

「くくく、面白いことをやっているな、模擬戦とは言え一国の代表候補生相手に性能テストとは。」

千冬は肩震わせるように笑いながら言う、一夏がなぜこれほどまで余裕ができるほどの技量があるのかはわからないがこれからのことを考えたなら楽しくて仕方ないのだろう。

自分を超えることのできるIS操縦者が現れるかもしれないという期待感もあるだろうが

「嬉しそうですね、織斑先生」

「ああ、これからが楽しみだよ。つサーベルを展開するのか!」

「え、なんでわかったんですか?!」

千冬言うのが、なぜがサーベルを展開する前だったからだろう、サーベル展開後もう一つのサーベルも背面バックパックから取り出し、二刀となり一夏が勝負をかけたことがわかった。

「・・・ああ、単なる勘だよ。」

「そうですか？ これからが勝負ですね！」

サイコフレームに意識の集中が見られるこちらから認識できるほどに・・・

一夏自体が機敏になりすぎている。これは何か起こるか・・・？

「15分、ずっと避け続けるとは恐れ入りましたわ。」

「セシリアの攻撃は正確で素直だったからな、分かりやすかったんだよ」

「なっ？！ ば、ばかにしてますの？」

セシリアが、頬を少し赤らめながら人指し指をぴんっとさせ言った。言い方悪かったか怒ってるような・・・？

「いや、褒めてる部分もあるんだが」

「ほ、ほめって？！ ああ、もう！ 今度こそ当てますわ！ っな？！」

「ここからは俺も仕掛けるぞ。」

俺は背面のバックパックからサーベル二本を取り出し両手に持ち構える。

さあ、ユニコーンの力もある程度分かった。あとはただ往くのみ。

「先から武装だしていなかったので、機器異常かと思いましたけど、

問題ないようですね」

「ああ、問題ないさ。だから——倒れるおおお——」  
「な?! あんな加速力があるんなって?! ディアーズ!!!」

セシリアが自分の周りに浮遊させていたディアーズを前面に展開し、弾幕を張る。

一夏はユニコーンの出せる全速力で突撃してきているのだ。高速になればなるほど、細かな機動は難しくなる。だから、当然被弾覚悟での突貫だと思うだろう、だが——

「サーベルを盾にした?!」

「これだけ、細い射線ならサーベルでも十分盾になるんだよ!」

二度、三度に渡る。命中だが、すべてサーベルで弾く多少のシールドエネルギーの減少はあるが、被弾時のそれと比べるまでもない。そして、一夏はセシリアの懷まで達した。  
セシリアが、銃口をこちらに向けるが

「く?!」

「遅い! これで終わりだあああああ!」

スターライトmk?はサーベルの一閃で切り裂かれ破壊される。そして、残りのサーベルの一撃、ユニコーンは光輝き図らずとも発動した零落白夜によってエネルギーは消滅し、シールドバリアーは切り裂かれ、落ちる運命にあったセシリアは、突如現れた先の銃よりも少し大型化したであろう、槍のような長銃の先が展開され青白い光の装甲を持つ突撃槍によって一夏の一撃は防がれていた。

「武器を隠しもってたの——なに!!!?」

「なんですのこれ? 一体なにが——」

セシリアのブルーディーズは光に包まれ、四つの1.5mを超えるような大型非固定浮遊ユニットのサイドバインダー、先の腕部装甲より大型化し丸みを帯びたアームアーマー、

腰部のスカートアーマーは小型のものに変わっており、バックパツクのバーニアからはユニコーンと同じく緑の光の粒子が見える。

ブルーディーズは華奢なイメージがあつたが、全体的に丸みを帯び重厚な鎧に変貌していた。はじめは灰色の装甲だったが青に変わる。青い装甲は変わらないが、それは大海を思わせる深い蒼。

―― 検索、第四世代型IS二号機 『クシャトリア』と確認

―― 特殊兵装サイコミュ兵器ファンネルビット搭載機

「だ、第四世代IS?! ユニコーンと同じ・・・」

―― 偽装プログラム解除完了、太陽炉マッチングクリア、正常稼働中

―― 相転移装甲展開、エフィールド発生装置稼働中

―― 各兵装コンディションオールグリーン

―― 第四世帯型IS 『クシャトリア』起動完了

「クシャトリア・・・? ブルーディーズが偽装なんですか?」

アリーナの観客席にはブルーディーズの変容を見ていたシャルルの心中は驚きに染まっていた。その近くにいる。筈にいきなりのできごとに声を上げた。

「な、なんだあのISは! いきなり姿が変わるなんて?!」

「第四世代型IS 『クシャトリア』、偽装プログラムを使って隠れて運用してるとは聞いていたけど、セシリアさんが使っていたなんて?!」

「シャルル?! あれを知ってるのか!」

箒はシャルルに、詰め寄り問いたです。

「わわわっ? そんなに慌てないで、たしかに知ってるよ。名前とその風貌だけでも、アレは東さんが作ったものなんだ、ユニコーンや僕のISもだけど」

「姉さんが・・・?」

「うん、でもこれで機体性能はほぼ互角、ハンデがあるせいで一夏の方が不利になった。しかも、まだ最適化処理と初期化が終わっていないから、一部のシステムと兵装に制限があるしこれじゃ!」

握りこぶしを作り、心配そうな声を出すシャルル。箒も、それに釣られ顔色を暗くする。

「一夏、大丈夫だよな? 一夏――」

「えええ?! ブルーディアーズのシグナルロスト、検索――該当機なし?! 未確認ISがセシリアさんに装着されてます! 一体なにがなんだがはわわわ?!」

監視用部屋にいる、千冬と真耶も混乱していた。真耶はあまりのことに目を回してた。

「山田くん、落ち着くんた。だがなぜオルコットに第四世代機が?」

「え? あの機体を知ってるんですか織斑先生。」

「あれも第四世代型IS、たしか名前はクシャトリアと言ったか」

「あ、あれも第四世代・・・?」

「ただこれで勝負が分からなくなった、相手も第四世代なら機体性能も互角のはずだからな。」

「たしかに、これで織斑くんの余裕はなくなることに・・・？」

そう織斑にはユニコーンの機動性を生かす力があるようだが、クシヤトリアの新型B.T兵器、ファンネルビットが仕様通りの性能ならセシリアの勝ちだろうな。だが、ユニコーンは第四世代の特殊機体だと束は言っていた。防御機構だけでも既存のISを置き去りにする性能に、太陽炉という、新たな動力炉を得てエネルギーそのものを再充填可能という反則といってもいい出力。これだけでも規格外の機体だというのにまだあるのか・・・？

「27分。持った方ですわね。褒めてさしあげますわ。」

「そりゃ、どうも・・・」

現状は最悪だ、六機のファンネルによるオールレンジ攻撃と、バインダーに各2門、肩部に2門、腰部に2門、計12門を内蔵されたメガ粒子砲の砲撃、近ずいても12門のメガ粒子砲の嵐、だからと言って離れもファンネルによる遠隔射撃、苦勞して数基落としたがまだまだ、かなりの数があるのか全く減らない。時折、槍のような長銃、オクスタライフルによつてはなたれたビーム砲によつて狙撃されて、気が休まることはまったくなかった。こちらの被害はビームサーベルが二本破壊されているし、各部装甲も見た目には問題ないがダメージが蓄積して中破判定、武装はビームサーベル二本と雪片式型があるが、雪片の方は実体剣なのであの相転移装甲は抜けない。実質ビームサーベル二本しか残っていない。搭載されている太陽炉は正常稼働してないのか、エネルギーの再充填は雀の涙ほどしかなく。もうすぐシールドエネルギーも三分の二を切ってしまう

「このクシヤトリアはよい機体ですわ。このファンネルいうB.T兵器、わたくしの思ったとおり動いてくれますし。いかに、ディア

ーズが使いにくかったか分かりますわ」

「おお、そうかいディーズ使いにくかったのか」

「ええ・・・」

セシリアが苦い顔をしながらいう、自分の思い道理に動かない武器なんてかなりのストレスが貯まるだろうしな。ファンネルはディーズと比べ小型になっているが、機動性も火力も全く落ちていないどころか上がっているだろう。ディーズ使用時はかなりの集中が必要で他のことができず、本人は棒立ちという致命的な欠陥がありもし、ユニコーンに射撃武器があればいい鴨だっただろう。

「さて、時間稼ぎはやめて貰いますわよ？」

「く、やっぱり気がついてたか」

「どちらにせよ、あまり気分は良くはないですけど、こちらの太陽炉正常稼動してこれだけのビーム兵器を使用してもそうそう減らないですねし、ですがそちらは——」

「ああ、満足に動いてないよ・・・気でも使わせたか？」

「ふふふ、敵に塩を送るのはここまでにしますわ。」

「最後の足掻きを見せてやるよ」

セシリアは、収納しエネルギー充填していたファンネルを六基展開し俺を包囲するかのように展開する。その距離は俺が最大加速で突っ込んででも対応できるぎりぎりの距離、散々ファンネルを落としたせいかその距離が知られてしまっている。もうこうなっては機動力による拡散や回避は意味をなさない。こちらにはエフィールドのような対エネルギーフィールドもなく、避けるしかないのに。反応速度そのものが桁違いに上昇しているせいか、避けてもすぐに対応される。直撃までタイムラグあるのである程度避けれるがじりじりとエネルギーを削られる。だから——取れる戦法は——

「さあ、お住きなさいファンネル！　これが貴方に送る鎮魂歌です」  
レクイエム

わ！」

「窮鼠猫をも噛むつてな、追い詰められた人間がなにをするか見せてやるよー!!」

ファンネルによる砲撃が開始される。俺は――

「ま、まさか一夏?!」

「シャルル？」

窮地に追い詰められた一夏をはらはらと見ていた二人、一夏のやろうとしたことを感じ取ったシャルルは、驚きの声を上げる。

「避けずに突っ込むつもりだ！」

「なんだつて?!」

「もう、あとがないからつてそのまま突っ込むなんて?!」

「無茶苦茶だ! 一夏、馬鹿なことをするなあー!」

そう、もうあとはない。なら深く考える必要はない、極力被弾を抑えそれでも被弾しても恐れず行けばいい、懐に入りさえすれば!

「避けないですって?! 捨て身ですか、ならそれ相応の対応をするまですわ!」

セシリアはサイドバインダーを花卉のように開き、メガ粒子砲を拡散モードで確実に当てる気である。俺はもうファンネルで対応できる距離にはいない、この砲撃を耐え抜けは俺の勝ちだ!! そして、俺は拡散メガ粒子砲の弾幕の中に突貫した。

「これが俺の最後の一撃だああああ」

「かかりましたわね?」

「な?!」

弾幕を抜けたあと最大出力で展開したビームサーベルの一閃を四つのサイドバインダーから展開された隠し腕が持つビームサーベルが十字にクロスして受け止めていた。

「さあ、これにて終幕ですわ!!」

「うわぁっ?!」

俺は四つのビームサーベルで弾かれ無防備となったその身に収束モードとなった12門にメガ粒子砲の直撃を――

「内なる可能性を持って、人が人たる力と優しさを世界にしめす。」

だれだこの人、それにここはISのアリーナじゃない? 何かのコンクピット?

あの人、おじさん? 誰なんだ、見てるとなんでこんなに悲しくなるんだ?

「人間だけが神を持つ」

そういった男性が少年に手を伸ばす、その手には力はなくとても弱々しい。そう今にも死んでしまいそうな声を出して。

「今を越える力、可能性と言うなの内なる神は、ここまできたその気持ちに揺らがぬ覚悟はあるか?」

少年と男性の手が繋がれる。

「え？」

「彼女が背負っているものは重いぞ、共に行くには世界の重みを背負う覚悟がいる。それでも・・・」

「自信とか覚悟とかない俺はただ彼女の必要とされたいだけなんです。」

ああ、このときはただそう思っているだけだった、俺はその本当の意味を知らなかった。

うん？　なんでそう思った？　こんな人見たことないはずなのに・・・

「ならば、これを持って往け」

男性に繋がれた手を引かれ少年はその手はあるモニターに触れる。そして、コックピット座る。機器が動き少年をスキャンした。

「これでもうこいつは、お前の言うことしか聞かん。お前を相応しい乗り手と判断すれば、ユニコーンは無二の力を与える、L+の箱への道も開けるだろう。」

「La+の箱？」

「我等、ビストー一族を100年に渡る呪縛、だが使いようによってはこの宇宙世紀に光明をもたらす。」

La+の箱、俺は・・・

「それは？」

「アンナは、この呪縛にお前を取り込ませたくないと私の前から」

母さん、俺を護るために・・・

「恨むだろう、アンナ、そしてお前。だが往け、恐れるな自分の可能性を信じて力を尽くせばおのずと道は開かれる。」

父さんの血に塗れた手が俺に触れる。くっ?!　なんで、なんで――!

「「なんでいまさら、勝手ですよ……」」

「許して欲しい、お前とはもっと、もっと……」

父さんの手が離れてゆく、遠く遠くなっていく父さんとの距離が――

「（バナージ、私の望みは叶ったよ。アンナ……）」

「「父さん!!」」

「「父さんって今……俺の……」」

父さんって、今さら……。俺は!!!

もう逢えなくなってしまった!　もう触れることのできない遠くへ逝ってしまった。

俺は――

一夏を襲った幾重の光の筋は、ユニコーンの発する。光によって曲がる。

「な?!!　遮った?　一体どうなってますの?!」

「「私のたった一つの望み、可能性の獣、太陽の子にして希望の象徴……」」

「声が・・・頭に響く?! な、なにを言ってますの?!」

なんですよ、あの機体から発する重圧感<sup>プレッシャー</sup>は?! 一体なにが!

「ぐ? なんだこれは、声が直接頭に?」

「へ、どうかしたんですか・・・?」

「いや、なんでもない。気にしないでくれ」

「そうですか?」

サイコフレームのオーバーロードだと?! これではあの時と同じじゃないか!! だがそこまでの意識の集中はないのか? しかしこれは――

「一夏の声が聞こえる・・・」

「頭に響く・・・何を言ってるんだ一夏?」

「母さんごめん・・・俺は――往くよ!!!」

――最適化処理完了、初期化完了

――太陽炉マッチングクリア

――インテンション・オートマッチク・システム稼働

――IS-Dシステム、発動

ユニコーン、それは可能性の獣。内なる可能性を示し神にもなる存在――

その身は開き、赤き光を放つサイコフレームが露出し、ブレードアンテナは開き、金のV字のアンテナとなる。その翼はさらに展開され四つのバーニアとなる。

「ファーストシフト—— え？ なぜ、あなたは泣いていますの？」  
「わからない、だけど、大切なことがあったはずなのに思いたせない」

「そう——」

「俺は、今を生きている。」

頬を伝う涙、先あった夢のような世界、ただの白昼夢なのか、その中で違う自分を見た気がするだけ。

俺は自分が信じた道を往くすべては今を始めるため……

「だから——いくぞ！ セシリア・オルコット！」

「な！？ 消えた？ どこいらっしやいますの？ センサーは……  
・反応がない？！」

ありえない、一気に何万kmも離れたとしても言うのですの？！ も  
しや、ジャミング？！

ハイパーセンサーを掻い潜るジャミングなんて——

「え？ ユニコーンの反応ロスト！ シールドエネルギーが計測不能です！ 一体なにが？！ 外部からジャミングでしょうか、だったら緊急した——」

「おちつけ！！ 山田君！ センサーをしつかり見るんだ！」

「あ、時々反応はありますよかった……でもシールドエネルギーの計測器が壊れたまま……でも、どうなっているんですか？」

「早すぎるんだ、ハイパーセンサーでも追いつけないほどに」

「なっ？！ そ、そんなことありえませんか！」

「だったらこの状況をどう説明する？」

「それは——」

モニターでは、まるで瞬間移動をしたかのような機動で次々とファ

ンネルが落とされ、搭載されていたファンネル24基すべてを失った、クシャトリア——セシリアが必死に追うが全く追隨できていない姿が移しだされていた。

「なにが起こっている。全く見えない?!」

「こ、こんな装備があつたなんて……」

「シャルル、お前も知らない物なのか?」

「う、うん。僕は単に機動性のある機体としか知らなくて……」

「機動性があるという次元の話ではないぞ! あれでは、どんな熟練者でも追えるはずがない!」

「一夏……」

アリーナ上空、二人が戦っている。いや、一人のIS稼働時間がまだ一時間も満たない世界初の男性IS操縦者によつて、規格外の第四世代を得て鬼に金棒となつていたイギリス候補生への蹂躪と行つてもいい戦況になつていた。本来同じ世代であつてもある程度は戦えるはず。パイロットの技量によつては一世代前の機体でも勝ちを取れるのが普通のIS戦闘だが、これは完全にただの狩り——殲滅戦だ。

「く?!完全に弄ばれていますわ——ジャミングを使った形跡がないなんて。そう、ただ目に追えないだけなんて……ありえませんかわ!!!! なあつ——」

気がついたら、目の前にセンサーの反応があり目線をやった瞬間、自分が持っていた、長銃、オクスタライフルが真つ二つに切り裂かれた瞬間だった。

そして——

「喋つてる時間があるなんて余裕だな、俺はこれの制御で精一杯だ

つてのに」

「あなたこそですわ！ 落ちなさい！」

セシリアは残った、12門のメガ粒子砲を拡散モードで放つ、がビーム光は一筋も当たった形跡はなくただ無為に通りすぎるだけだった。そして、次の瞬間――

「これで終わりだあああああ」

金色の光の粒子を撒き散らしながら、その身を赤く染め。勇ましく雄たけびを上げ。光輝く光剣となった雪片式型を振り下ろす、一夏の姿が見えたのだった。

#### 第4話 システムI S・D（後書き）

セシリアのクシャトリアこれがないと書けないと思ったんですよ。ちなみにこのクシャトリア、劇中にはなかった、エフィールドが搭載されています。公式の設定の中にはあるんですけど、描写がないせいでないも同然って感じでした。

機体の関係上、今回はシャルロット党というか、オルコツ党な内容でした。

次回はある意味ギャクパートですw

## 第5話 大海の蒼と金色の太陽（前書き）

今回、シャルロットVSセシリア戦です。なかなか難作でした。で  
わ、はじまります。

## 第5話 大海の蒼と金色の太陽

最後の一撃を与え、完全にセシリアのクシャトリアが絶対防御を發動させシールドエネルギーを消失させた。いくら、半永久動力炉である。太陽炉であつても一度に膨大な消費が起これば再供給に間に合わないのは自明の理。そのせいでセシリアはISを解除させられ、自由落下を始める。俺のユニコーンはセシリアが倒れると 동시에IS-Dシステムが解除され、赤いフレームは白い装甲に収められ二本のアンテナも通常の角に戻っていた。

「絶対防御が発動したせいで、気を失ってるのか?! 今、助ける  
!!!」

俺は急いでバーニアを吹かしてセシリアの方へ向かい、両手で受け止め横に抱いた。(お姫様だっこってやつだな)

「おい、大丈夫か? 怪我してないか?」

「——あ、えっ?!」

気絶から起きたら、目の前に彼の顔が?! そんな心配そうな顔しないでくださいまし……。というより、お、お、お姫様だっこ?!?!

「きゃああ?! 離してくださいまし?!?!」

「あ、ちよつと暴れるな落ちちまうぞ!」

「はっ?! へ、変なところを触らないでくださいな!」

「ごめん。不可抗力だ。」

「まあ、よろしいですけど。ふふふ」

ふとした拍子に、セシリアの胸をさ、触っちゃった笑ってる。大丈夫なのか？ 普通なら怒りそうだけど、それにさっきまで敵同士だったのに。

「試合終了。勝者——セシリア・オルコット」

「はあ？」

「ど、どういことですか？！」

IS用ピット、そこでは理不尽な結果に怒りを露にするセシリアと、負けた原因のあまりのみつとも無さから心底落ち込んでる一夏がいた。

「な、なつとくがいきませんわあああ——あのように、完全に負けていたというのに判定勝ちなんて？！」

「この大馬鹿者が機体特性を理解したつもりで、後先考えずにエネルギーの浪費をするから悪いんだ」

大馬鹿者が、すごく不名誉なランクアップなんですけど。ここでダウンじゃないのが千冬姉らしいといえば千冬姉らしい

「途中でシールドエネルギーが計測不能になったんですけど、装備の使用状況、計測可能になってからの数値、シャルルくんから提供してもらった仕様書の最低使用エネルギーで計算しても完全に三分の二どころか、五分の一も残っていなかったみたいですし一応、負けは負けです。あははは」

「自業自得だ一夏」

ま、まあ。最後の剣旋、よかったかつこよか、ってなにを考えてるんだ私は？！

箒は頭を振り赤くなった顔を隠すかのように身を下げる。

だが、最後にあつた。お、お姫様だつこなんぞして……  
うらま——いや——！！けしからんだ！！

「なにしてんだ篤……？」

「っは？！ と、とにかくお前が悪いんだ！！」

「う！ それを言われたらたしかにそうだけど……」

「一夏さん！あなたそんなことで納得しないでくださいまし！」

「いや、でも数値が」

「数値上そうでも納得できないんですわああ——」

「ひゃあ？！ お、怒らないでくださいいい——」

「落ち着け馬鹿者が！」

千冬姉の出席簿が舞った。まさか、ユニコーンの単一仕様能力が膨大なエネルギー消費を引き換えにエネルギーを消滅させるという反則的な能力が仇になって、必要以上の過剰火力で攻撃してたなんて千冬姉曰く、単一仕様能力、零落白夜を起動しなくても十分に勝率はあつたらしい。とどめは最後の元々、高出力ビームザンバーである雪片式型の全力展開の一閃とそれにもなった零落白夜の最大展開、これによりクシャトリアの多く残っていたシールドエネルギーは一気に消滅したが、もっと効率を考えるなら数撃にわけた雪片式型の剣撃で十分いけたらしい。要は自滅、情けなさ過ぎる。

「ぼ、僕の決めたハンデがここに来て枷になつてたなんて……  
ごめん一夏、あの時は頭に血上つて正気じゃなかったよ。」

シャルの落ち込みよう半端ない。でも、普通はブルーディアーズの装備からユニコーンを見て、対エネルギーフィールドであるエフィールドと対物理に強固な相転移装甲、それに通常のISでは不可能なエネルギー再充填の可能な太陽炉があるのに負けると思わないよな。まあ、エフィールド発生装置付きのシールドが間に合わなかつ

たの正直誤算だったらしいが。

「シャル気にするな、俺が悪いんだからさ？　な、元気だそうぜ！」

「一夏・・・ごめん、ごめんね？」

「まあ、気にするなっ！」

そういつて、にかつと笑いシャルの背をさする俺。

そしたらシャルは少し赤くながら、天使の様な笑みを浮かべた。

「い、一夏くすぐったいよ」

「あ、ごめんな？」

「うっん、だ、大丈夫だから」

「い、一夏、もうそれくらいでいいじゃないか！」

「わわわ?!」

筈が詰め寄って、俺とシャルを引き離す。なに慌ててるんだ？

まだ、赤いけどいいのか？　そこでなぜか千冬が呆れたようにため息をついた。

「はぁ・・・（この天然たらしめが）」

「千冬姉？」

「この負け犬はほっておいて、山田くん時間の方は」

ま、負け犬って確かにそうだけど俺って・・・とほほ

「あ、はいまだ大丈夫です。」

「ならば、準備が整い次第。オルコット対デュノアの模擬戦を行うぞ」

「わ、わたくしは納得したわけではありません!!　そんなものは辞退させて貰います!!」

セシリアがびしつと人指し指をまつすぐにし千冬姉に対してそういう、どうでもいいけど。よくそのポーズしてるよな、まあ似合ってるとは思っけど。

「すでに決定事項だ。なんのためにアリーナを借りたと思うそんな理由で辞退できると思うな、文句があるなら、そのハンデを容認した自分を恨め。」

「うっうー」

千冬姉の有無を言わせない文句によって論破されるセシリア、たしかにそうだけどここは心情的にもって話だろうけど。

「あ、でも機体はそれほどひどくないんですけど。専用のBT兵器や武器の方の消耗が激しくて、もう一戦できるかどうか。」

「な、なら今回の模擬戦は終わりですわよね!!」

かなり必死になって言うセシリア、戦いたくないというより。単にまだ納得しかねるんだろな、俺だってあんな負け方して勝ちって言われても納得できん。

と、そのとき行き成り警告音がなり響いた。

ブーブーブー

「つつ? 山田くん、状況の確認を!」

「へ? は、はい。な、何者かが学園のサーバーハッキングをかけてます! あ、乗っ取られた・・・?」

「なんだと・・・? こんな数秒で、つまさか?!」

ああ、そっぴや。こんなこと簡単にやってのける天災(誤字にあら

ず)がいたな。

そうしているうちに、ピットのスクリーンのその人物が映しだされた。

「もすもすひれもすーみんな、会いたかったよー束さんだよー」

そこに写しだされた人物は頭に機械で出来たウサギの耳に不思議の国のアリスのような服を着た天才篠ノ之束だった。

「やはり、束だったか・・・ただ連絡するだけなら学園にハッキングするんじゃない!!」

「やあよーちーちゃん怒らないでえーそれより、せっちゃんせっちゃん!」

「は、はい?!」

いきなり話かけられ、驚いて素っ頓狂な声をあげるセシリア、というか知り合いだったのか。

「クシャトリアどうだった? タイミングもぴったりだったでしょ?!」

「突然変わったのは束さんの仕業でしたか・・・」

「姉さん・・・なにやってるんですか」

「あははは、やっぱり束さんだったんだ・・・」

皆、一様に驚いているようだ。

あの狙ったようなタイミングは本当に狙ってたからか・・・

あ、千冬姉が本当に頭が痛いのか手で押さえている。

「それで、束、なんのようだ。ハッキングまでしたんだ、さぞ立派な理由だろうな?」

「あ、あははは、やだなあーちゃん。ちゃ、ちゃんとした理由だよ？」

千冬姉の目が完全に据わってる・・・完全に切れてるうっうっうっうっ？！

束さんがいたら冷汗かいてる。ハッキングしたのもどっせ、目立つからとかそんな理由だろうなあー

「ねえねえ、せつちゃん。困ってるよね？」

「え？ いえそれほ——」

「困ってるよね?!」

「は、はい!!」

うあ、束さんが無茶苦茶必死になってる・・・

「こんなこともあるのかとー予備のファンネルとオクスタンライフ  
ル用意しといたよーシャルちゃん確認よろしくねえーあ、あとお土産あるから。でわ、さらばだ——」

ぶつっといきなり通信は途絶え、学園のサーバーも正常に戻る。  
早口だったし、今逃げる準備でもしてるんだろうか・・・

「うち・・・デユノア、オルコットの装備を確認後、再開だ。二人とも用意しろ」

「は、はい!!」

「わかりましたわ・・・」

舌打ちがもれてるんですけど・・・それより、二人の模擬戦かぁー  
どうなるんだろ？

アリーナではもうすでに二人が対峙していた。セシリアは先の一夏戦で全損した。ファンネルはすべて補充され、万全な状況であり。オクスタンライフルも健在だ。クシャトリアの装甲にも目立った損傷もなくいつでも戦闘可能といった状況だった。対して、シャルルは、IS『暁』を装着し、M950マシンガン二丁を両手に装備していた。

「感じからして相轉移装甲を装備していませんのね？」

「機体には実装されていないよ、ジールドだけだけど。」

シャルルの暁は相轉移装甲展開前の灰色の装甲はなく、太陽を思わせるような金色の装甲でそのすべてを覆っている。頭部のヘッドギアに着く細身の角、左腕部には相轉移装甲と、Eカーボン製の相轉移複合素材により、対ビーム兵器と対物理に絶大な防御力を持つ盾を装備していた。右腕部には3連マシニングノンの基本装備がある。ただ、それよりも存在感があるものがあつた。両肩に浮かぶ、大型ウェポンコンテナである非固定浮遊ユニットである。背面には1mほどのシールドビットが四基バックパックに搭載されていた。バーニアはなく、とてもではないか機動力のある機体には見えない。当然、PICが搭載されているのだから浮遊はできるだろうが。

「シャルルさん、そんなバーニアもない鈍重そうな機体で大丈夫ですか？」

「そう思うのは仕方ないけど、問題ないよ？」

「一つ提案ですけど、同じ四世代機ハンデはいらなくてよ。織斑先生それでいいですか？」

「うむ、お前がいいならよいが、どうなっても知らんぞ・・・」

なぜか、千冬が同情するかのような声色で言うなにかあるのだろうが、それを感じ取れるほどの観察眼はセシリアにはなかった。

「はい?? シャルルさんもいいですか?」

「・・・うん。だけど本当にいいの・・・?」

「貴方もわからない人ですわね、こうして、対等な機体に同じ代表候補生なんです。これでハンデを着けたら、双方に不名誉ですわ。」

「男性だからとか気にしないんだね」

「ま、まあ。一夏さんの实力を見たら、そう言っていた自分がどれほど愚かだったかわかりますから!」

はずんだ声、紅潮した顔、なぜか誇らしそうに語るセシリア。それを見たシャルルは・・・

「そうなんだ・・・(この人も一夏のことが・・・)」

「それでは、いきますわよ!」

「うん、いいよ。先に謝つとくね、ごめん・・・」

「はい? まあ、よいです。お往きなさいファンネル!」

クシャトリアのサイドバインダーから六基のファンネルが展開されそのまま、六門のビーム砲がシャルルに目掛けて発射された。シュンという短く音を発し迫る砲撃をシャルルは避けなかった。そして直撃する――が結果は、六基のファンネルの撃墜音が響いただけだった。

「び、ビームが反射したのですの?!!」

「僕の暁には八咫鏡っていう対ビーム兵器には最強とっていいほどの装甲を持ってるんだよ、だから避ける必要はなかった。ちなみにただの装甲だよ? エネルギー消耗なんて考えない方がいい!」

「な、なんですってええー!」そ、それでは、はじめから模擬戦をする意味さえないでわないですか!」

クシャトリアの兵装はすべてビーム兵器で統一されている。そんな機体に絶対的な対ビーム耐性と言っていい装甲持ちの暁は、最悪の相性と言えるだろう。勝負を挑む方が愚かという所

「あ、ちなみに、収束された近接ビーム兵器なら効くよ？」

「ふ、ふふふ、なら往かせて貰いますわ！！」

バインダーのバーニアを全開にし高機動用展開装甲によって、最高速度に達した。クシャトリアの両腕には同腕部に搭載されたビームサーベルを持ちシャルルに突貫した。

それをただ見ている、シャルルではない、両腕に持ったM950マシガンを放ち弾幕を張る。だがしかし、対物理に強固な防御力を誇る相転移装甲を持つクシャトリアには誤差の範疇だろう。

「そんな豆鉄砲では、クシャトリアの装甲は抜けませんわよ！」

「そんなの分かってるよ。第四世代にはセシリアさんより詳しいんだ、だからこそだよ？」

「そうですね、ですが結果は変わりませんわ。切り刻まれなさい！！」

セシリアが、二本のビームサーベルを暁に切り付けようにした瞬間、暁の大型ウェポンコンテナの背面が可変し腕となりその手にはビームサーベルが握られていた。二本対二本、計四本のビームサーベルが打ち合う、シャルルはその瞬間、得意とする。高速切替ラピッドスイッチによって、M13ショットガンを瞬時に両腕に装備した。そして、至近距離で放つ。それを避けるように、セシリアは距離を取った。

「ちゃんとシールドエネルギー見た方がいいよ」

「なんですか、その余裕・・・っつ！ 予想以上に減りが激しい？！！」

シールドエネルギー残量が先までの機動、サーベル、被弾状況からも微々たる消費のはずが、まるでシールドエネルギーを直接減らされたような被弾状況だった。

シャルルの暁には物質の制御、生成を行う。単一仕様能力、天覇城<sup>てんぱじょう</sup>塞<sup>さい</sup>がある。これにより弾速、弾頭強度が強化された実弾兵器を使用していたのだ。

「一体、どんな魔法を使っただんですの？」

「さあ、僕は魔法使いじゃないから分からないな」

だがこれで、セシリアも気が付いただろう、シャルルのIS暁には相転移装甲を抜くことができる実弾火器がある。だが、自分はその無敵とも言える対ビーム耐性を持つ装甲のせいで全くビーム兵器が使えない。

でしたら、こちらにも考えがありますわ・・・これは賭けですけど、どうせ失敗してもビーム兵器が使えないと分かるだけ！！

「そうですか、ファンネル！」

「っ？ なにをする気、無駄だって分かっているはずだけど？」

「ちよっとした趣向を凝らしようと思いましね。気に入ってくださいるといいですわ！！」

セシリアは、ファンネルをクシャトリアの周囲に追従させたまま。新たに各サイドバインダーのビームサーベルを展開し、再度突撃する。

「そんな馬鹿正直に突っ込んで、いい鴨だよ！！」

シャルルはM90アサルトマシンガンを二丁展開し弾幕を張り、シャルルは相手との距離に合わせたの兵装の高速交換——ラビット・スイッチ高速切替を持って、常に自分がどの距離においても優位に立てる状況を作り出す。相手の武器、間合い、状況を把握し高速切替によって武器を使い分け、一定の間合いと攻撃リズムを保ち続ける戦法『ミラー・デ・デサ砂漠の逃げ水』の使い手。ビーム兵器の使えないセシリアは少し離れるだけでも、ただの的と化す——

「今ですわ!!」

「な?!」

——M90アサルトマシンガン破損、右腕部軽微の損傷

「さすがに、武器まで八咫鏡を使ってないようすわね？」

セシリアが狙ったのは、武器破壊。ファンネルのビーム砲をM90アサルトマシンガン中てる。八咫鏡の絶対性からビーム兵器への意識が薄れていたシャルの慢心を付いたのだ。あれほどの対ビーム耐性を持つ素材をなぜ、このクシャトリヤ、ユニコーンに使用しなかったか。装甲全てとは言わなくても八咫鏡製の盾を作るだけでも十分に相手への重圧感となっていただろう。なぜか、そんなのは分かっている。作るのが困難だったからだ、だからこそ。武器という破損し易いものに使うことは考えられなかった。セシリアはそう推理し、賭けに勝った。

「これで、あなたはビーム兵器を避ける必要ができましたね？ ふふ」

「こんなこと、考えるなんてね。ごめんね、正直悔ってたよ。」

「いいいえ、ここから本気を出して頂ければ結構ですわ!!」

「だったら、こっちも勝負に出させてもらっよ!!」

シャルルは右手を前に突き出した。それに呼応するように、四基のシールドビットが花弁状に前面に展開される。

「——天覇城塞、天岩戸」

暁から天覇城塞発動時に微量しかでていなかった黄金の光が、その身を輝かすほどの大量に溢れだす。その姿は、まさに太陽の煌きのような。盾は開き、光の装甲を顕現させる。現れたのは元は一基1m程だった盾は四基合わさり。そして、展開装甲の発動により、二倍にもなった。4m超の巨大な黄金の盾がシャルルの前に姿を見せた。

「な?! これは!」

「これは暁が持てる最強の盾、天覇城塞の大規模運用時に使用できる。太陽が身を隠す、天岩戸」

「最強の盾? そんなもの、クシャトリアで切り裂くだけですわ!」

セシリアはバインダーの展開装甲を高速形態に変更し最大戦速でサーベルをクロスさせ、天岩戸に斬り付けた——

「サーベルが掻き消えた?! — 一体何故ですの?!」

そう、接触と同時にサーベルのビーム刃が結合が解かれ無散したのだった。それに驚き、セシリアは距離を取った。

「いったはずだよ? 最強の盾だって、天覇城塞で八咫鏡を生成、粒子状に展開したんだ。」

「八咫鏡を作ったというんですの?! それは生成が難しいんでわ

ないんですの？」

「それを可能にするが天霸城塞てんぱじょうさいの力、これで本当に終わりだ！」

暁は瞬間一気に加速した、バーニアがないはずの暁が異常な速度で突貫してくる。そのまま、クシャトリアに接触した。

「ぐ?! なんてそんな加速力が？」

「暁は元々、バーニアなんて必要ない! 思考主推進機関イメージ・アルゴリズム・ドライフで道を作れるんだから!!」

思考主推進機関、純粋数学を用いてISの周りの物理法則を書き変えながら機動を行う。そのためバーニアは一切必要はない。

ただ、突撃してきただけ! これくらいの衝撃なら相転移装甲で防げますわ!! 防御を解除した時が勝負ですわ! さあ、その身をさらけ出さない。

「開け!」

「待っていましたわ、この瞬間を!」

「それはこっちのセリフだよ?」

「?!!!」

天岩戸を開いた瞬間、その時を待っていたセシリアには予想外のことが起きた。暁の隠し腕

フォールディングアームズ両腕にはM90アサルトマシンガンが握られており、そこから発射されたA I S G M (対IS誘導ミサイル)で、自分のサーベルが破壊されたのだった。

「クレイモア抜けられると思わないでよ!!」

暁の左右の大型ウェポンコンテナが開き、数百に及ぶチタン合金製

炸裂鋼球弾がクシャトリアに殺到する。次々と着弾していく。  
つつ?! シールドエネルギーは? なんとか耐えきった。この隙  
に!!!

「まだ、終わりじゃないよ?」

「え?」

「どんな装甲でも打ち貫くのみ!!!」

左手の盾が下がり、杭打ち機<sup>バイルバンカー</sup>リボルビング・ステークが露出し、  
ステークがセシリアの胸に打ちつけられた。ドン——破裂音がしり  
ボルビング・ステークのリボルバーが回転する。そして次々と回  
り、ステークが打ちつけられる。そのまま、クシャトリアは灰色の  
装甲に変わり、ESは解除されてたことから絶対防御が発動されシー  
ルドエネルギーが尽きたことが分かる。

「これが僕の切り札<sup>ジョーカー</sup>だよ!」

「試合終了。勝者——シャルル・デュノア」

## 第5話 大海の蒼と金色の太陽（後書き）

ラファール見たらだれでも思ふこと、杭打ち機バイルパンカーは男のロマンだよな。  
つてことで暁のヤタノカガミも付けたいから、アルトアイゼンと合  
わせてみようとなりました。あ、ちなみに作中に出てきた天岩戸で  
すけど、某錬鉄の英霊ロー・アイアスが使ってる熾天覆う七つの円環のイメージで  
すね。でわ、また次回

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1783s/>

---

IS 太陽の心臓と可能性の獣

2011年4月16日19時37分発行